

作況ニュース（第3号）

水 稲

（発行：令和5年6月14日）（編集：令和5年6月12日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

浅水管理で分けつの促進を

—地域、ほ場間による生育量の差が大きい—
—ほ場の異常還元に注意—

1 今後の気象の見通し

(1) 東北地方1か月予報（6月10日～7月9日）【令和5年6月8日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に期間の前半はかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目（6月10日～6月16日）は、高い確率80%です。2週目（6月17日～6月23日）は、東北日本海側で高い確率70%です。

○ 次回の予報発表予定： 1か月予報 毎週木曜日14時30分

【季節予報】 3か月予報 6月20日(火) 14時

https://www.jma.go.jp/jp/longfcst/102_00.html

2週間予報 毎日随時更新

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

(1) 天候の特徴

【秋田地方气象台】

5月下旬： この期間、天気は周期的に変わり、28日から29日にかけて前線の影響により大雨となった所があった。

6月上旬： この期間、天気は周期的に変わり、4日は気圧の谷の通過により、内陸で大雨となった所があった。旬平均気温は、概ね高いから平年並。旬降水量は、概ね平年並からかなり多い。旬間日照時間は概ね平年並から少ない。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (hr)	平年比 (%)	階級区分
5月下旬	16.7	-0.2	平年並	54.5	142	多い	75.9	106	平年並
6月上旬	19.4	+1.0	高い	21.5	91	平年並	62.6	91	平年並

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

各地域振興局による定点調査（6月9日）では、あきたこまち（63地点）は、草丈25.2cm（平年比99%）、m²当たり茎数120本（同80%）、葉数5.9葉（平年差-0.2葉）であった。ひとめぼれ（8地点）は、草丈27.7cm（平年比100%）、m²当たり茎数264本（111%）、葉数6.7葉（平年差+0.1葉）であった。（表-1）

あきたこまちの定点における移植日の平均は、平年より1日早い5月19日となった。茎数は県北と県南で平年よりかなり少なく、県北で平年比78%、県南では平年比74%だった。県北は5月5半旬に一時的な低温期間があり、活着と初期生育が停滞した。他地域より移植が遅い県南は、活着時期に当たる5月下旬から6月1半旬に最高気温の低い期間があり、水温や地温の上昇が緩慢だったと推定され、初期生育が遅れている。

ひとめぼれの定点移植日の平均は、平年より2日早い5月14日で、移植後の5月中旬は好天だったことから、初期生育は順調となり、茎数が平年より多くなっている。

育苗期間の気象は、5月2～3半旬に一時的な低温期間があったものの、概ね高温で経過したことから、苗の生育は平年並～早くなり、一部では徒長苗や老化苗を移植したほ場も見受けられ、活着と初期生育に、ほ場間差が見られる。

表-1 定点調査結果（6月9日調査）

品種	地区	草丈			m ² 当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
あきたこまち	県北	26.1	102	97	137	112	78	6.1	-0.1	-0.2
	中央	26.4	106	104	150	124	96	6.4	0.1	0.1
	県南	24.0	105	99	95	101	74	5.5	0.1	-0.3
	全県	25.2	104	99	120	110	80	5.9	0.0	-0.2
ひとめぼれ	中央	27.7	98	100	264	117	111	6.7	0.1	0.1

※平年値：平成25年～令和4年までの過去10年平均

農試水田の標植区では、草丈は30.0cm（平年比114%）、m²当たり茎数は281本（同126%）、葉数は7.3葉（平年差+0.3葉）だった。（表-2）

また晩植区では、草丈は25.1cm（平年比112%）、m²当たり茎数は95本（平年比79%）、葉数は5.8葉（平年差-0.2葉）だった。標植区における分けつの初発生は5月26日で平年より4日早く、分けつの発生は平年を上回っている。一方晩植区では、分けつの初発生は6月8日で、平年より2日遅く緩慢な増加だったが、6月11日以降は平年並に推移している。（P13、表-5、図-2）

表-2 気象感応試験の生育状況（あきたこまち、6月9日調査）

試験区	移植日	草丈			m ² 当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
標植	5月15日	30.0	107	114	281	147	126	7.3	+0.2	+0.3
晩植	5月25日	25.1	121	112	95	83	79	5.8	-0.2	-0.2

注) 平年値は、標植はH12～R4年、晩植はH29～R4年の平均値を用いた。

2) 直播栽培

6月9日現在の農試及び定点の生育概況は、湛水直播のあきたこまちでは、全県平均で苗立率は64.5%、m²当たり苗立数は101本、草丈15.1cm、m²当たり茎数は130本、葉数は3.8葉であった。平年に比べて、苗立数は並、m²当たり茎数は少なく、草丈は短く、葉数は少なかった。（表-3）

*農試：出芽率・苗立率(%)=出芽数・苗立数/播種粒数(実測値)×100

表-3 定点調査結果(湛水土中条播:品種 あきたこまち、農試および農業振興普及課調査:6月9日調査)

設置場所	播種月日 (月/日)	出芽率(%)			苗立率 (%)	苗立数			草丈			m ² 当たり茎数			葉数		
		播種 10日後	播種 20日後	苗立率 (%)		本年 (本/m ²)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差	平年差
農試	5/10	21.8	50.3	50.3	87	88	100	18.0	98	105	87	83	62	4.0	±0	-0.2	
大館市	5/11	58.8	58.8	62.4	116	90	118	16.8	108	98	182	141	136	4.4	+0.2	+0.4	
井川町	5/8	71.1	82.1	81.6	110	120	108	12.3	93	77	180	197	115	3.4	-0.4	-1.0	
美郷町	5/13	38.5	54.1	54.1	97	61	102	17.5	100	111	110	62	83	4.1	-0.6	-0.1	
横手市	5/20	60.7	73.9	73.9	93	93	98	10.9	81	69	93	87	70	3.0	-0.7	-1.2	
全県	5/12	50.2	63.8	64.5	101	90	105	15.1	96	92	130	114	93	3.8	-0.4	-0.4	

その他地点：出芽率・苗立率(%)=出芽数・苗立数/播種粒数(播種量からの推定)×100

(3) 病害虫の発生概況

1) 斑点米カメムシ類

牧草地すくい取り調査（北秋田市、秋田市、大仙市）における越冬世代成虫の発生時期は、アカヒゲホソミドリカスミカメが5月18日、アカスジカスミカメが5月30日で、いずれも平年より11日早かった。

3 当面の技術対策（6月中旬～下旬）

活着と初期生育に、ほ場間差がみられ、茎数は平年より少ないほ場が多い。前年の主な作柄低下要因である穂数不足にならないように、また県産米の品質や生産の安定には強勢茎主体の穂数確保が重要であることから、6月下旬まで有効茎を確保できるように、各ほ場の生育状況に応じたきめ細かな栽培管理を行う。

本年の移植以降の気象は、極端な低温期間は短く、気温は平年並～高く経過した。
また、6月は高温で経過する見通しであり、茎数確保のための基本技術のほか、病虫害防除や雑草防除を適切に実施する。

(1) 水管理

分けつ発生が少なく、茎数の不足しているほ場が多いことから、浅水管理を徹底して分けつの発生を促進する。また、水温と地温を高めて日較差を大きくするため、かん水は水温の低い早朝に短時間で行う。中苗の移植栽培では第3号から第6号までの1次分けつ、直播栽培では第1号から第4号までの1次分けつを確保する。

5月中旬の高温期間に移植したほ場を中心に、藻の発生や表層はく離、ワキなどの土壌の異常還元がみられるほ場が多くなっている。今後も高温が予想されることから還元しやすいほ場や既に異常還元しているほ場では、短期間の落水や水の入れ替えにより異常還元を防止し、水稻の生育への影響を低減する。

目標茎数を確保したら、中干しを開始し、新たな分けつを抑制する。

(2) 直播栽培の追肥

目標の苗立数（㎡当たり80～100本）が確保できていれば2～4葉期の追肥は必要ないが、㎡当たり苗立数が60本以下の場合は10a当たり窒素成分で2kg以下の追肥を行う。5葉期以降の追肥は倒伏を招くので行わない。

(3) いもち病予防のため余り苗は直ちに処分

余り苗で発生したいもち病は、周辺ほ場への強力な伝染源となるので、余り苗は土中に埋めるなどして直ちに処分する。

(4) 葉いもち防除の水面施用剤は適期に散布

移植栽培での葉いもちの全般発生開始期は平年で7月7日であるが、全般発生開始期が早まると葉いもちや穂いもちが多くなる傾向がある。葉いもち防除のための水面施用剤は初期の発病を抑えることで葉いもちの発生量を少なくするので、側条施用剤や育苗箱施用剤を使用していない場合は、遅くとも6月18日までにオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、またはルーチン粒剤を10a当たり1kg水面施用する。

直播栽培では移植栽培に比べて葉いもちの全般発生開始期が遅れる傾向があるため、葉いもちに効果のある種子塗沫剤を処理していない場合や、播種時に側条施用剤等の防除剤を使用していない場合は、6月23日頃（6月20～25日）にオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、またはルーチン粒剤を10a当たり1kg水面施用する。

（令和5年度版秋田県農作物病虫害・雑草防除基準（以下、防除基準）p.23～25、41～42参照）

(5) 初期害虫の防除

移植日の遅いほ場や直播栽培では生育量が小さいため、イネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）、イネミズゾウムシ等の初期害虫による食害がイネの生育を抑制することがある。害虫の発生状況をよく観察し、必要に応じて防除を実施する。（防除基準p.30～36、43～44参照）

(6) アワヨトウの飛来

長距離移動性害虫であるアワヨトウ成虫の飛来が確認されており、今後の発生に注意する。

牧草地において第1世代幼虫の発生が確認されていることから、水田に隣接する小麦畑や牧草地、休耕田等からの移動・加害に注意する。発生が多い場合は食害が多くなる前に防除する。

(7) ばか苗病の早期発見と早期処分

採種ほ周辺ほ場では、ばか苗病を発見したら直ちに株ごと土中に埋めて処分する。発病株の処分は遅くとも6月末までに終える。

(8) 斑点米カメムシ類の増殖を抑える雑草管理

主要加害種であるアカスジカスミカメは、水田内のホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し増殖するので、下記(10)を参照し水田内の除草に努める。

また、農道・畦畔などのイネ科雑草でも増殖することから、農道・畦畔や法面、休耕田等の雑草地は、地域でまとまって一斉に除草し、斑点米カメムシ類の密度低下を図る。(防除基準p. 37~39参照)

(9) 表層剥離・藻類等の防除

表層剥離やアオミドロ等の発生が多くなると地温や水温が低下し、生育が抑制されるので適切な対策を講ずる。対策としては、気温の低い早朝や雨の日の水の入れ替えを基本とする。移植栽培では、水管理で十分な効果が見られない場合は、中耕機による攪拌やモグトン粒剤(ACN剤)を散布する。

(10) 中・後期除草剤の適正使用

中・後期剤の使用にあたっては、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、それぞれの雑草に除草効果の高い剤を選択する。また、十分に湛水ができないほ場では水面施用除草剤の十分な効果が得られない。用水確保が難しいほ場では茎葉散布剤の使用などほ場条件に合わせて防除する。

1) 移植栽培

①ノビエのみ見られる場合は、ヒエクリーン1キロ粒剤/ワンステージ1キロ粒剤、ヒエクッパエース1キロ粒剤/スケダチエース1キロ粒剤、クリンチャー剤のいずれかを散布する。ヒエクリーン1キロ粒剤/ワンステージ1キロ粒剤、ヒエクッパエース1キロ粒剤/スケダチエース1キロ粒剤の使用時期はノビエ4葉期までだが、効果発現に日数を多く要するので早めに散布する。クリンチャー剤は粒剤、ジャンボ剤、液剤によって使用時期や使用量が異なる。また、クリンチャー剤は散布後に発生したノビエには効果がない。

②ノビエ及びその他の難防除雑草が見られる場合は、アトトリ豆つぶ250、レプラス1キロ粒剤、クリンチャーバスME液剤、ワイドアタックSC、フォローアップ1キロ粒剤/ワイドアタックD1キロ粒剤で対応する。(防除基準p. 317~321参照)

2) 直播栽培

- ①ノビエのみ見られる場合は、クリンチャー剤、ヒエクリーン1キロ粒剤／ワンステージ1キロ粒剤のいずれかを散布する。
- ②ノビエ以外の難防除雑草（ホタルイ類、コナギ、オモダカ等）が主に見られる場合は、バサグラン液剤を散布する。
- ③ノビエ及び難防除雑草が見られる場合は、ザーベックスDX1キロ粒剤、クリンチャーバスME液剤、ワイドアタックSCを散布する。
(防除基準p. 323～328、p. 335～336参照)

(11) ばか苗病の早期発見と早期処分

採種ほ場では、ばか苗病を発見したら直ちに株ごと土中に埋めて処分する。発病株の処分は遅くとも6月末までに終える。

(12) 農薬の飛散・流出防止の徹底

農薬を散布する場合は、周辺作物への飛散防止対策を徹底する。
また、除草剤や水面施用剤の散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

(13) 農作業安全対策の徹底

次の注意事項を守り、十分な安全対策を講ずる。また、これから気温が高くなる時期を迎えるため、こまめな水分補給や休憩を取るなど、農作業中の熱中症対策を行う。

- ①体調管理を万全にし、心身とも健康な状態で作業を実施する。
- ②作業は計画的に実施し、長時間や夜間の作業は避ける。
- ③運行する道路やほ場の危険箇所を確認する。
- ④点検・修理はエンジンを停止して行う。
- ⑤機械の点検・整備を徹底する。
- ⑥軽トラック、トラクタ運転時のシートベルトの着用を徹底する。
- ⑦日中の気温の高い時間帯を外して作業する。
- ⑧単独作業は避け、声かけ等により体調に異常がないか確認しながら作業を行う。

【時期別・主要作業別指導事項】

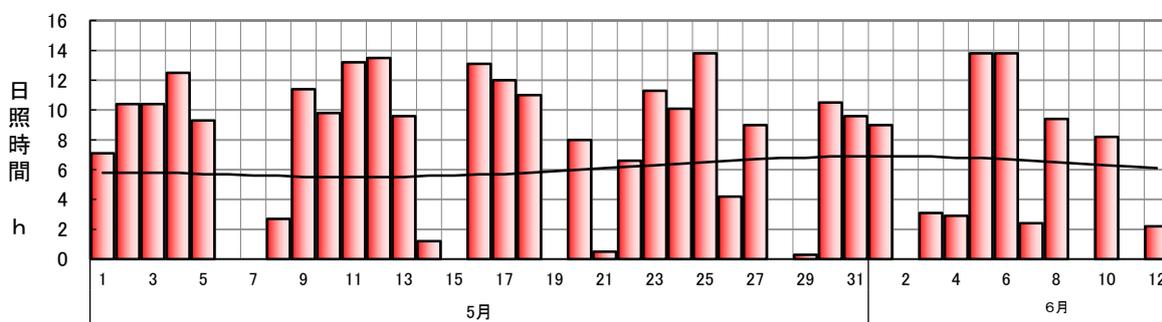
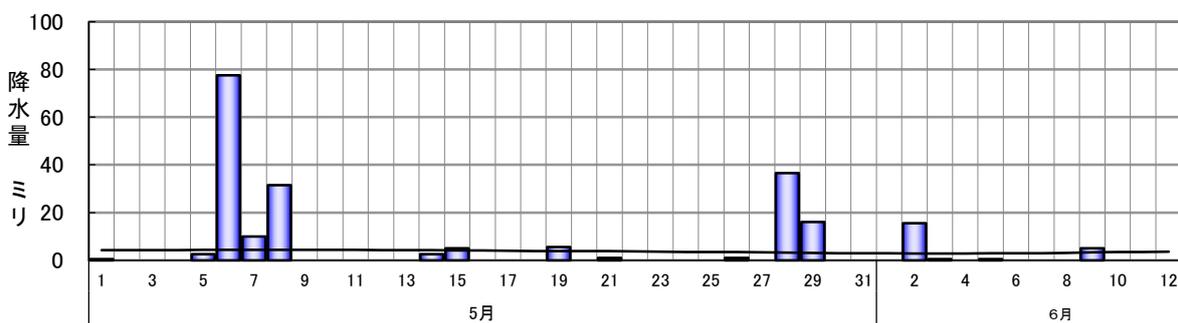
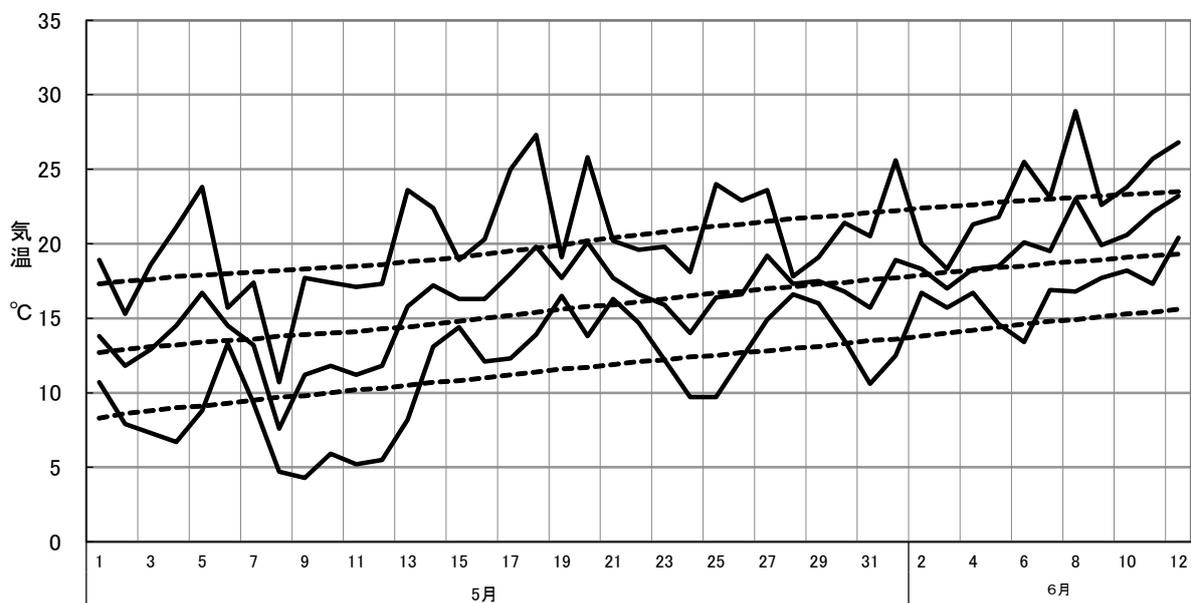
月旬	作業の種類	主な指導事項
6月中旬 ～ 6月下旬	水管理	<ul style="list-style-type: none"> ○ 浅水管理の徹底により分けつの確保に努める。 ○ かん水は早朝に行い、短時間で終わるようにする。 ○ 目標茎数を確保したら、中干しで分けつを抑制する。 ○ 落水しにくいほ場や異常還元ほ場では、中干しに併せて溝切り等を行い、排水を図る。
	直播栽培の追肥	<ul style="list-style-type: none"> ○ 苗立数が60本/m²以下の場合は、5葉期までに10a当たり窒素成分で2kg以下の追肥を行う。
	余り苗の処分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 余り苗にいもち病が発生すると、強力な伝染源となるので、余り苗は、直ちに土中へ埋め込んで処分する。
	葉いもち防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 移植栽培で側条施用剤や箱施用剤を使用していない場合は、遅くとも6月18日までにオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、またはルーチン粒剤を10a当たり1kg散布する。 ○ 直播栽培で播種時に側条施用剤を使用していない場合は、6月23日頃（6月20～25日）にオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、またはルーチン粒剤を10a当たり1kg散布する。
	初期害虫の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6月に移植したほ場や直播栽培では生育量が小さく、イネヒメハモグリバエ（イネミギワバエ）やイネミズゾウムシの食害によってイネの生育が抑制されることがある。害虫の発生状況をよく観察し、必要に応じて防除を実施する。
	畦畔等雑草の管理	<ul style="list-style-type: none"> ○ 斑点米カメムシ類の増殖を抑える（密度低下）ため、草刈りなど雑草管理は地域でまとまって行う。
	中・後期除草剤の適正使用	<ul style="list-style-type: none"> ○ 湛水管理が難しい場合は、茎葉散布剤で防除する。 ○ ノビエが見られる場合は、ヒエクリーン1キロ粒剤／ワンステージ1キロ粒剤、ヒエクッパエース1キロ粒剤／スケダチエース1キロ粒剤、クリンチャー剤のいずれかを散布する。 ○ ノビエ及びその他の難防除雑草が見られる場合は、レブラス1キロ粒剤、クリンチャーバスME液剤、ワイドアタックSC等に対応する。
	表層剥離・藻類等の防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 水の入れ替え等に対応する。 ○ 移植栽培では必要に応じて中耕機による攪拌やモゲトン粒剤（ACN剤）を散布する。
	ばか苗病の対策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 採種ほ周辺ほ場では、ばか苗病を発見したら直ちに株ごと抜き取って土中に埋めて処分する。 ○ 発病株の処分は遅くとも6月末までに終わる。
農薬飛散・流出防止	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農薬を散布する場合は、周辺作物への飛散防止対策を徹底する。また、除草剤や水面施用剤の散布後7日間は落水、かけ流しをしない。 	

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和5年5月1日から6月12日の気象経過図(観測地点：秋田地方気象台)

(資料 秋田地方気象台)



(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(資料 秋田地方気象台)

項目 \ 時期	5月上旬		5月中旬		5月下旬		5月計	
	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較
平均気温(°C)	12.7	-0.8	16.4	+1.6	16.7	-0.2	15.4	+0.2
降水量(mm)	122.0	272%	13.0	31%	54.5	142%	189.5	152%
日照時間(h)	73.6	128%	81.6	147%	75.9	106%	231.1	125%

項目 \ 時期	6月上旬	
	本年	平年比較
平均気温(°C)	19.4	+1.0
降水量(mm)	21.5	91%
日照時間(h)	62.6	91%

(3) 各地域の気象経過

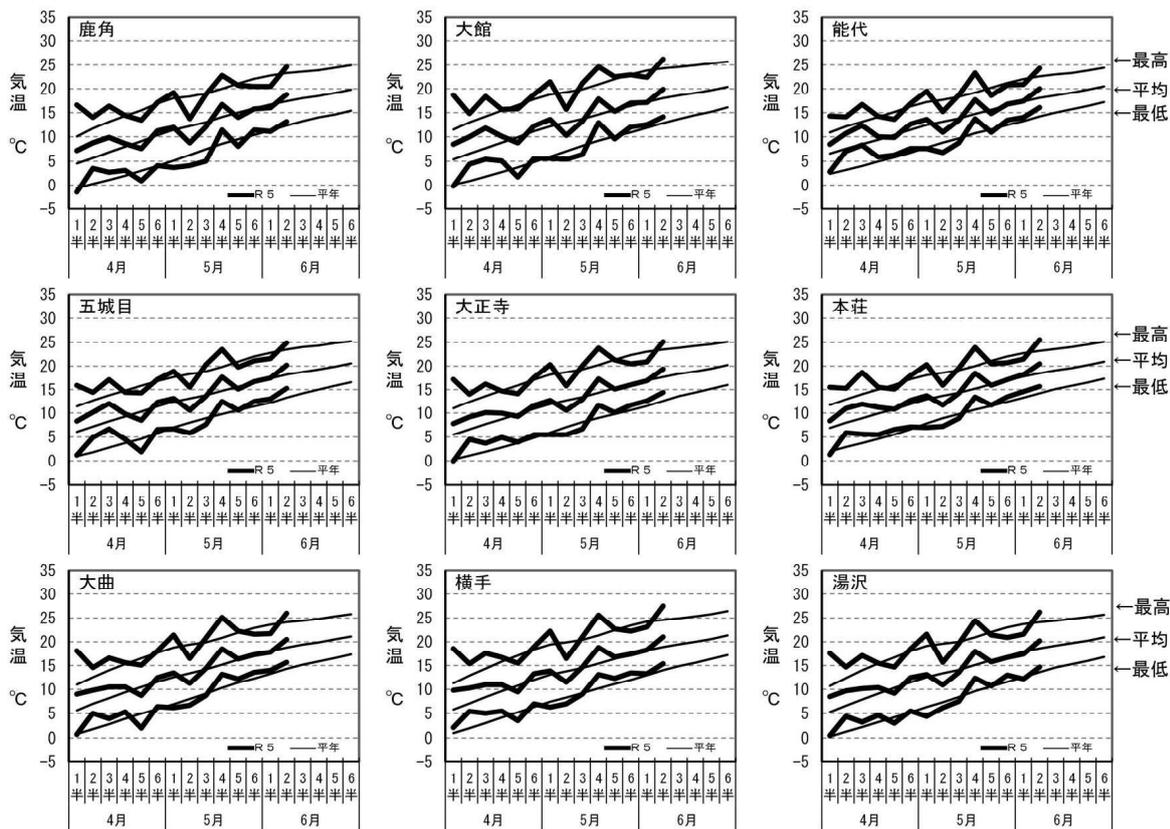


図-1 各地域の気温の推移(半旬別、アメダス観測地点別、6月10日現在)

2 農作業進捗調査結果（各地域振興局調査）

区分	地域	始期（5%）			盛期（50%）			終期（95%）		
		本年	前年	平年	本年	前年	平年	本年	前年	平年
田植作業	県北	5/12	5/13	5/14	5/20	5/21	5/22	5/29	5/28	5/29
	中央	5/9	5/8	5/10	5/18	5/19	5/19	5/29	5/29	5/29
	県南	5/16	5/14	5/17	5/23	5/23	5/24	5/30	5/30	5/31
	全県	5/11	5/11	5/12	5/21	5/22	5/23	5/30	5/30	5/30

3 水稻定点調査結果（各地域振興局6月9日調査）

表－1 定点調査結果（品種：あきたこまち）

地域振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
鹿角	5	24.1	103	91	121	109	66	6.2	0.2	-0.1
北秋田	9	27.0	104	99	157	122	81	6.2	0.0	-0.2
山本	9	26.4	101	100	127	106	85	6.1	-0.3	-0.2
秋田	9	27.1	105	104	161	129	99	6.6	0.1	0.1
由利	2	23.3	108	100	103	106	86	5.3	-0.1	-0.3
仙北	10	24.4	100	98	106	100	71	5.8	0.0	-0.1
平鹿	11	22.9	110	99	87	112	79	5.2	0.2	-0.4
雄勝	8	24.9	104	100	94	94	75	5.7	0.1	-0.2
全県平均	63	25.2	104	99	120	110	80	5.9	0.0	-0.2
6月10日の理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	24	23	26	159	140	179	6.2	5.9	6.4
	中央	25	23	27	174	145	204	6.3	6.0	6.6
	県南	24	23	25	125	113	138	5.8	5.6	6.0

表－2 定点調査結果（品種：ひとめぼれ）

地域振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
秋田	2	27.2	104	105	290	108	124	6.9	0.3	0.6
由利	6	27.9	96	98	255	121	106	6.6	0.0	-0.1
中央地区平均	8	27.7	98	100	264	117	111	6.7	0.1	0.1

4 関連成績

(1) 気象感応試験（あきたこまち）

1) 生育概況

表－3 気象感応試験の生育状況（6月9日調査）

試験区	移植日	品種	草丈					㎡当たり茎数					葉数				
			本年 cm	前年 cm	前年比 %	平年	平年比 %	本年 本	前年	前年比 %	平年	平年比 %	本年 葉	前年	前年差 葉	平年	平年差 葉
標植	5月15日	あきたこまち	30.0	28.1	107	26.4	114	281	191	147	223	126	7.3	7.1	0.2	7.0	0.3
晩植	5月25日	あきたこまち	25.1	20.7	121	22.4	112	95	114	83	120	79	5.8	6.0	-0.2	6.0	-0.2

注) 平年値は、標植はH12～R4年、晩植はH29～R4年の平均値を用いた。

標植区では、草丈は30.0cm（平年比114%）と長く、㎡当たり茎数は281本（同126%）とかなり多く、葉数は7.3葉（平年差+0.3葉）が多かった。晩植区では、草丈は25.1cm（平年比112%）と長い、㎡当たり茎数は95本（平年比79%）で少なく、葉数も5.8葉（平年差-0.2葉）で少なかった。

5月4半旬は気温がかなり高く、標植区の活着は良好だった。一方、5月5半旬から6月1半旬は、平均気温は平年並であったものの、最高気温が平年より低く経過しており、水温や地温の上昇が抑制され、晩植区の活着と初期生育が緩慢になったと推定される。

表－4 出葉状況（6月9日調査）

試験区	年次	出葉期									
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉	
標植 (5月15日移植)	R5	5/20	5/25	6/1	6/7						
	R4	5/19	5/26	6/2	6/10	6/16	6/22	6/29	7/8	7/15	
	平年	5/23	5/29	6/4	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/18	
	平年差	-3	-4	-3	-4						
晩植 (5月25日移植)	R5	5/29	6/5								
	R4	6/1	6/5	6/10	6/15	6/20	6/26	7/5	7/15	7/23	
	平年	5/31	6/5	6/11	6/16	6/22	6/27	7/5	7/14	7/21	
	平年差	-2	±0								

注: 標植の平年値は、H12～R4年までの平均。晩植の平年値は、H29～R4年までの平均。

移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.5葉。本年は標植は3.7葉、晩植は3.9葉。

標植区の出葉は、平年より3～4日早く経過している。また晩植区では、移植苗の葉数が平年より0.4葉多い3.9葉だったことから5葉の出葉期は平年より早かったが、緩慢な初期生育により、6葉の出葉は平年並になった。

2) 分けつの発生状況（6月12日調査）

標植区における分けつの初発生は5月26日で平年より4日早く、次節位別の発生では、1次2号分けつが10個体当たり8本（平年2本）、1次3号分けつが10本（同6本）と平年を上回っている。移植した翌日から5日間の気温が平年より高かったことにより、活着は良好だったことと、その後も概ね平年並の平均気温で経過したことにより、良好な初期生育になった。

一方、5月25日移植の晩植区では、分けつの初発生は6月8日で平年より2日遅く、緩慢な増加だったが、6月11日以降は平年並に推移している。

表-5 次節位別分けつの発生本数(6月12日現在)

		1次分けつ						2次分けつ		分けつ
		1号	2号	3号	4号	5号	6号	2号	3号	合計
標植	R5	2	8	10	10	10	0	2	5	47
	平年	0	2	6	9	10	10	1	8	46
晩植	R5	0	1	3	8			0	1	13
	平年	0	3	6	10	10	10	1	4	44

注1) 四捨五入の関係により各分けつの合計と”分けつ合計”は必ずしも一致しない。

注2) 平年; 標植はH13~R4年までの最終発生数の平均、晩植はH29~R4年までの最終発生数の平均

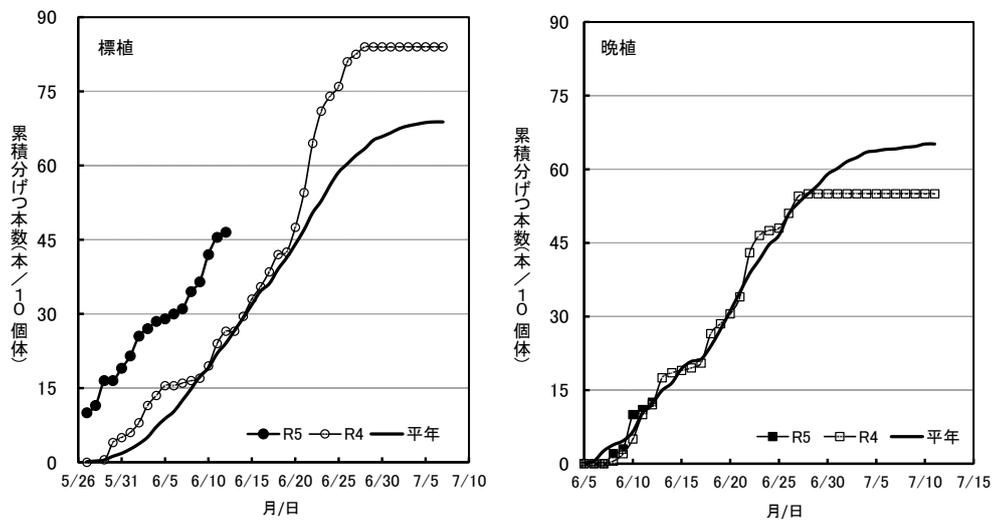


図-2 分けつの発生状況(6月12日現在)

3) 定点（あきたこまち）の生育状況

調査ほ場における本年の移植進捗率は、県北と県南では平年より早く、R4年と同等～やや早い傾向にあった。中央では5月中旬は平年並の進捗だったが、後半はR4年と同等に早かった。

6月9日現在の葉数は、県北ではほ場間差が大きく、平年を下回るほ場が多い。中央では前半に移植したほ場は概ね平年並だが、後半に移植したほ場は平年を下回る葉数である。県南では5月18日より前に移植したほ場以外は、平年を下回る葉数である。全体としてR4年と同様の推移になっている。

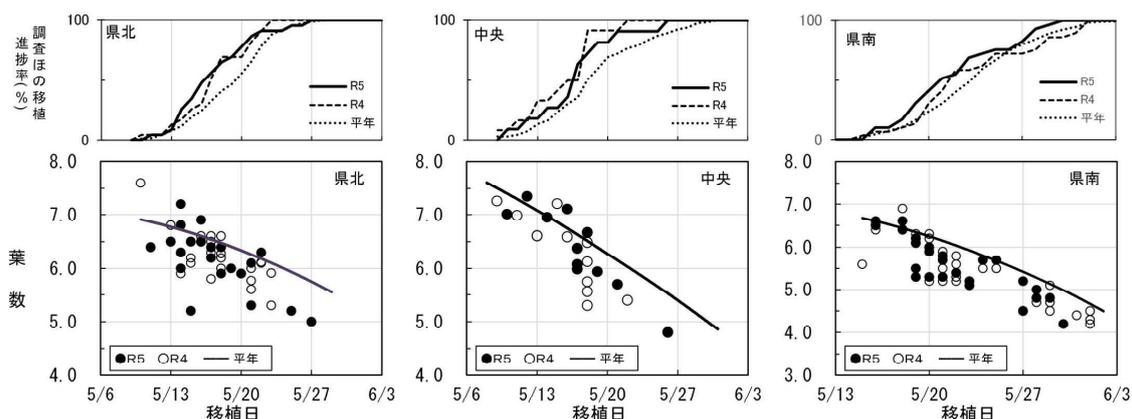


図-3 調査ほ場の移植進捗率(上段)および移植日と葉数の関係(下段)
(あきたこまち、6月9日定点調査、平年はH25～R4の平均を近似線で平準化して表示)

調査ほ場の葉数と茎数増加率の関係は、県北では7葉前後のほ場で順調な茎数増加が見られるが、6.0～6.5葉程度のほ場で茎数増加率は、R4年並に平年より低いほ場が多い。中央では概ね平年並からやや下回る程度の茎数増加率であり、県南では移植が遅いため葉数も少ないが、6葉以上のほ場で茎数増加率が平年やR4年より低いほ場も見られる。

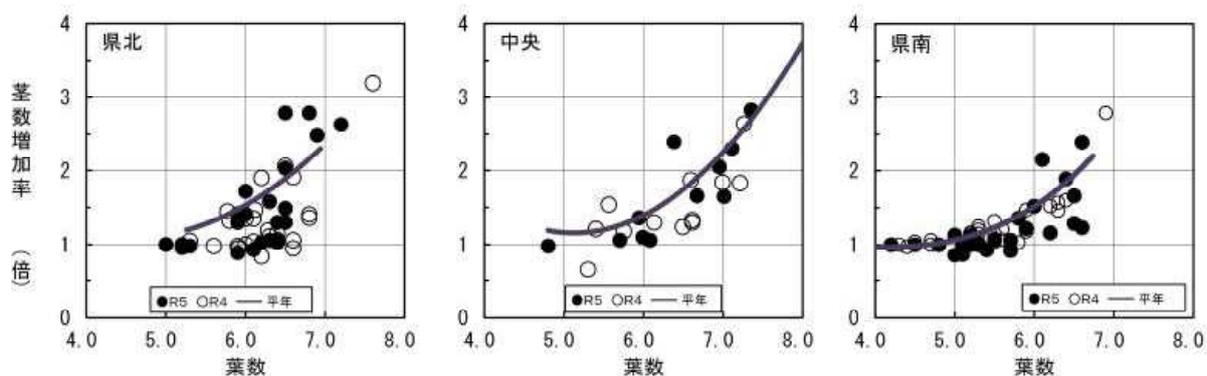


図-4 葉数と茎数増加率の関係
(あきたこまち、6月9日定点調査、平年はH25～R4の平均を近似線で平準化して表示)
茎数増加率＝茎数÷植え付け本数

(注: 中苗の場合、主稈第6葉伸展中(5.1～6.0葉)に3号分けつ(以下3号)、主稈第7葉伸展中(6.1～7.0葉)に4号分けつ(以下4号)が発生。植え込み本数に対して3号のみが全主稈に発生した場合、茎数増加率は2。さらに4号が完全に発生した場合の茎数増加率は3になる。)

(2) 直播作況試験

1) 直播水稻の出芽・苗立

農業試験場の㎡当たり播種粒数は172粒（平年139粒）であった。苗立率は50.3%で、平年差-12.5ポイントと平年を下回った。㎡当たり苗立数は87本となり平年並となった。（表-5）

本年の移動平均気温は5月7日までは平年よりも低く経過し、その後は平年よりも高く経過した。（図-4）

播種後、出芽率10%に達した日までは7日（平年差±0日）、播種から出芽揃期（苗立数の90%が出芽した日）までは17日（同+4日）と、出芽揃期は平年よりも遅くなった。（図-5、6）

表-5 農試直播作柄解析ほ場の苗立（あきたこまち、湛水土中条播、6月9日調査）

播種月日	苗立率			㎡当たり苗立数		
	本年(%)	前年差	平年差	本年(本)	前年比(%)	平年比(%)
5/10	50.3	-21.7	-12.5	87	88	100

注) 平年値：過去10年間（H25～R4）の平均値

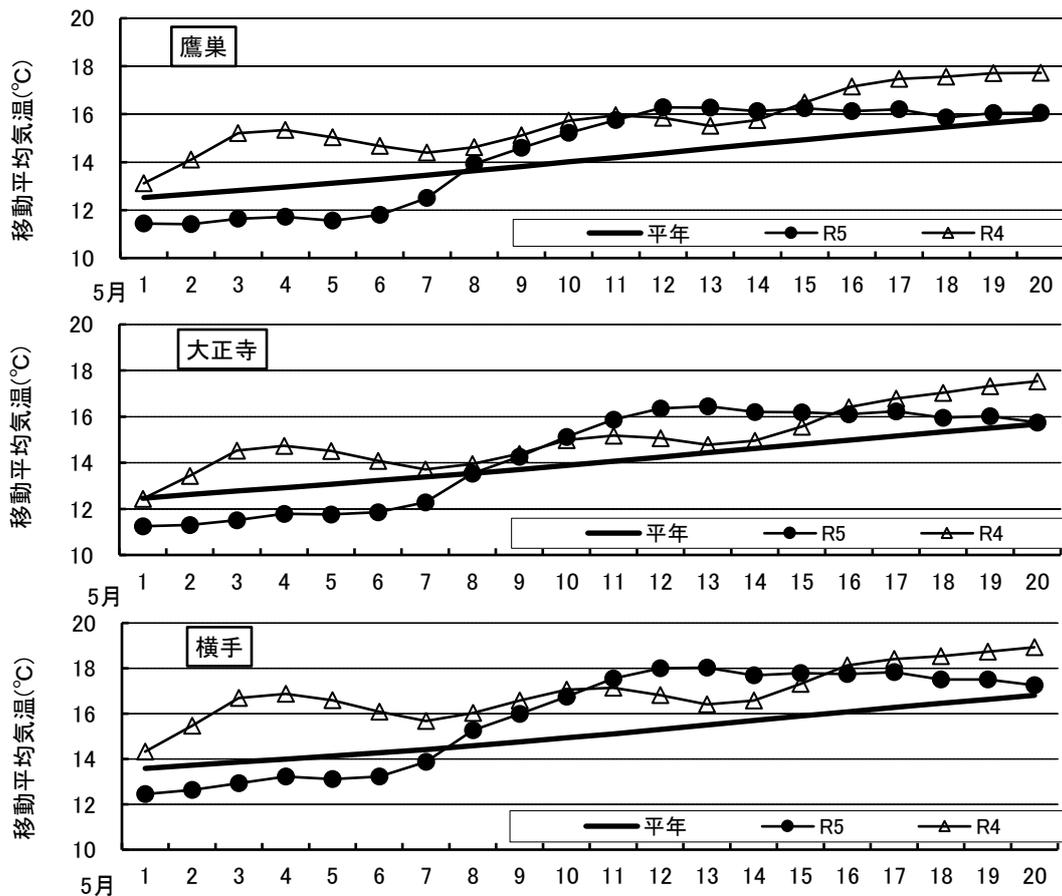


図-4 播種翌日から10日間の移動平均気温（アメダスデータ）

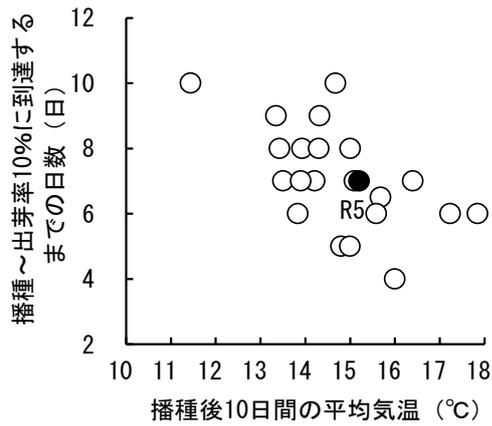


図-5 播種後10日間の平均気温と
出芽率の関係(H14~R5年)

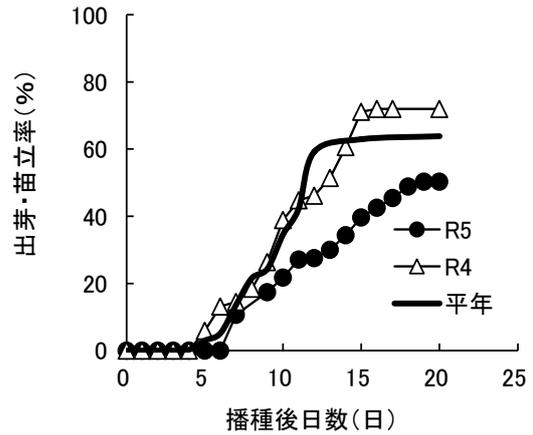


図-6 出芽・苗立率の推移

注) 平年値：過去10年間(H25~R4年)の平均値

2) 直播水稻の生育概況 (6月9日現在)

6月9日調査の生育状況は、草丈18.0cm(平年比105%)、 m^2 当たり茎数は87本(平年比62%)、葉数は4.0葉(平年差-0.2葉)であった。(表-6)

本年の農業試験場における直播水稻の生育は、平年と比較して葉数は平年並、草丈は平年よりも長かったが、茎数増加がなく、 m^2 当たり茎数は少なかった。

調査 月日	草丈			m^2 当たり茎数			茎数増加比			葉数		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年	前年差	平年差	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
6/9	18.0	98	105	87	83	62	1.0	-0.1	-0.6	4.0	±0	-0.2

表-6 農試直播作況ほ場の生育概況(あきたこまち、湛水土中条播、5月10日播種、6月9日調査)

注1) 平年値：過去10年間(H25~R4)の平均値

注2) 茎数増加比=茎数/苗立数

注3) 苗立数は6月9日現在で m^2 当たり87本(平年比100%)

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

OSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・秋田県内の水稻の生育状況
- ・水稻および大豆の技術情報
- ・異常気象対策
- ・その他、秋田米に関する情報



こちらのQRコードから登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部

生産環境部

TEL 018-881-3330

内線(422・423・424)

内線(306・310)

秋田県病虫害防除所

TEL 018-881-3660

秋田地方气象台

TEL 018-864-3955

東北農政局秋田県拠点 統計チーム

TEL 018-895-7303

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

TEL 018-860-1786

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は6月30日（金）の予定です】